

週末保養参加者アンケート結果概要（第四版）案

「福島の子ども保養プロジェクト」運営委員

西崎伸子（福島大学）

2016 年 3 月 15 日

、
2011 年 3.11 の震災から 5 年が経過した。しかし、県内ではいまだに東京電力福島第一原子力発電所から放出された放射性物質にともなう影響が続いている。とくに放射能の感受性が大人の 3～4 倍高いとされる子どもへの影響が心配され、福島県外に母子避難を中心に約 4 万 3 千人（2016 年 2 月末現在__復興庁データ）、県内避難を合わせると約 10 万人が避難を続けている。一方で、もっとも避難者数が多く計上されていた 2012 年 6 月 1 日の 164,264 人からは減少し、強制避難区域の避難指示解除もあって、帰還者数が増加している。

県内では除染が広範囲におこなわれてきた。2016 年 2 月には生活圏の里山の除染がおこなわれることも国によって明言された。2012 年 4 月以降、放射性セシウムの基準値に乳幼児食品が加えられたり、流通する農産物の検査体制が整備されたりするなど各種の施策がとられ、食材に対する不安感は解消されつつある。一方で、2011 年 6 月から福島県が県民健康管理調査（現県民健康調査）を実施し、その結果および評価が出てきているが、原発事故との関連性は不明のままである。

このような状況で、「福島の子ども保養プロジェクト」（通称コヨット！）は 2011 年 12 月に始まり、約 4 年間継続してきた。当初は低線量地域への避難を望みながらも、諸事情によりそれが困難な子育て世帯のニーズを把握し、それらのニーズにきめ細かく対応する体制を整え、身体的・心理的・金銭的に支援をすることを目的とし、福島県・山形県・宮城県等の低線量地域で保養を継続してきた。現在では、原発事故から 5 年を経て、社会状況が大きく変わってきていることから、子育て世帯のニーズを適宜理解する必要性が高まっている。とくに最近では、小学生低学年やいわき市民からの保養参加ニーズが高まっている。

本報告は、2014 年 7 月から 2016 年 9 月に実施した「福島の子ども保養プロジェクト」の週末保養企画参加者（乳幼児保養）546 世帯から回答を得たアンケートの集計結果の概要である。アンケート調査の結果は、2012 年 1 月 7 日～7 月 14 日までに実施された週末保養企画に参加した 505 世帯の集計結果を第一報（回収率：87%）、2012 年 7 月 21 日～2013 年 1 月 16 日までに実施された週末保養企画に参加した 334 世帯の集計結果を第二報（回収率：93.4%）、2013 年 3 月 1 日～2014 年 6 月 21 日までに実施された週末保養企画に参加した 940 世帯の集計結果を第三報（回収率：82.3%）として報告している。本報告は、それら 3 回分の集計結果にその後の調査結果を加えたものである。なお、第一報の質問項目は、第二報・第三報と異なり、今回の第四報も第二報・第三報とは質問項目を変更したため、共

通項目を比較の対象とした。四報を通しての結果概要は以下の通りである。

- ・参加者は、中通り北部および郡山市からが大多数を占めるが、いわき市からの参加が増加している。いわき発着の希望も増えている。母子での参加比率がわずかに上昇している。
- ・企画への満足度は高い。子どもの遊び、大人のリフレッシュの満足度は高く、他の参加者との交流については若干低い。
- ・食品・食材の産地を気にする割合は減少し、子どもに外遊びをさせている割合が増えている。
- ・原発事故後の子育ての相談は、従来どうり、家族や友人関係でなされている。それに加えて、避難先や保養先で知り合った仲間という回答が今回複数みられた。

これらのことから、食材や外遊びなど、個別の不安は一見解消されつつあると捉えることができるが、原発事故の影響は子育て世代の日常生活や個々の意識にいまなお強く残っている。とくに、参加が多い福島県中通りは、放射能による健康影響への不確実性が高く、リスク認知が政府（「専門家」）と市民の間で異なること、リスク対処行動が市民間で異なること、強制避難区域との補償等の差異が可視化しやすく社会的分断が生じやすい特徴がある。今後は、帰還者の動向、関連して、浜通りの参加者の動向を把握し、小学校低学年のプログラムを評価する必要がある。

いずれにしても参加者は不安の解消を保養企画に求めているが、保養企画だけで多種多様な不安を解消することは現実的ではない。豊かな自然環境における外遊び機会の提供や、家族間だけでなく信頼できる場からの多様な情報を得る機会の提供など、現在の参加者ニーズをふまえた企画が本プロジェクトに求められている。

[1]参加世帯の居住地（県市町村名・上位10位）

福島市と郡山市が7割を占める。その他、県北自治体からの参加者が各回ともに多数を占めていたが、第三報ではいわき市からの参加が4ポイント、第四報では1ポイント増えていた。

第一報		第二報		第三報		第四報	
福島市	45%	福島市	48%	福島市	46%	福島市	46%
郡山市	25%	郡山市	23%	郡山市	24%	郡山市	22%
白河市	8%	伊達市	7%	いわき市	6%	いわき市	7%
伊達市	7%	二本松市	6%	二本松市	5%	伊達市	7%
本宮市	5%	白河市	4%	須賀川市	5%	二本松市	4%
二本松市	4%	本宮市	3%	本宮市	4%	須賀川市	3%
いわき市	3%	須賀川市	3%	白河市	3%	白河市	2%
須賀川市	1%	いわき市	2%	桑折町	1%	本宮市	2%
国見町	1%	相馬市	1%	鏡石市	1%	川俣町	1%
三春町	1%	田村市	1%	国見町	1%	桑折町	1%

[2]参加者の家族形態

母子での参加比率は36%（第一報）、42%（第二報）、46%（第三報）、52%（第四報）と上昇している。

[参加者の構成]

第一報		第二報		第三報		第四報	
父母子	53%	母子	42%	母子	46%	母子	52%
母子	36%	父母子	46%	父母子	44%	父母子	44%
祖母・母子	3%	祖母・母子	5%	祖母・母子	8%	—	
父子	1%	父子	3%	父子	2%	父子	4%

[3]週末保養企画への満足度

第一報（96%）、第二報（97%）、第三報（98%）といずれも高い。

【第四報の結果】

子どもを遊ばせることができましたか？ : 100%ができたと回答
 大人のリフレッシュはできましたか？ : 99%ができたと回答
 他の参加者と交流はできましたか？ : 84%ができたと回答

[4]普段の生活について

食品・食材の産地を「意識する」が 11 ポイント減少し、「やや意識する」が 7 ポイント上昇している。子どもに外遊びをさせている割合は、第二報（24%）から第三報（37%）にかけて 13 ポイント、第三報から第四報にかけて 12 ポイント上昇している。休日の過ごし方について、県内外の線量が低いところに出かけるが、第三報から第四報にかけて 14 ポイント減少し、原発事故前と同じが、8 ポイント上昇している。

① 食品・食材を購入する際に産地を意識しますか？

	第二報	第三報	第四報
意識する	68%	59%	48%
やや意識する	32%	38%	45%
まったく意識しない	1%	3%	7%

② 日常生活における子どもの外遊び

	第二報	第三報	第四報
させている	24%	37%	49%
ときどきさせている	60%	53%	45%
させていない	16%	10%	6%

③ 休日の過ごし方について

	第二報	第三報	第四報
家の中で過ごす	11%	13%	13%
定期的に県内の線量が低いところに出かける	30%	30%	39%
定期的に県外の線量が低いところに出かける	24%	21%	(統合)
室内で遊べる場所に出かける	31%	28%	32%
気にしていない（原発事故前と同じ）	3%	8%	16%

[5]相談できる相手の有無

相談できる相手がいない割合は 38%（第二報）から 34%（第三報）にかけて 4 ポイント減少している。第四報ではさらに 14 ポイントに増加している。家族、両親・親、母親はいずれも自由記述欄に記述された回答者によるカテゴリーを用いている。第三報では「母親」が増加している。

	第二報	第三報	第四報
はい	62%	66%	80%
いいえ	38%	34%	20%

[相談相手（上位 5 位）]

第二報	第三報	第四報
友人（ママ友を含む） 夫 家族 両親・親 小児科医・医師	友人（ママ友を含む） 夫 母親 両親・親 家族	友人（ママ友を含む） 夫 両親・親 母 家族

【第四報において特記】

- ・気にしているママ友や仲間、価値観のあう友人、同じ考え方の友達、放射線を心配しているママ
 - ・県外避難経験のあるお友達、避難した友人、避難していた時の友人、避難元で友達になった人、避難先で知り合った人、避難友達
 - ・保養で交流できたお友達、保養で知り合った人、保養で知り合った仲間、保養で知り合った友達、保養にいく友人、保養プロジェクトスタッフ、保養を企画している人、保養先の人
- 保養先の友達、保養仲間

[6]自由記述欄の頻出後と頻出回収
別途掲載